

セネガルの子供たちに教育を！ バオバブの会

私たちの支援活動 その3「障がい児への取り組みと学校調査フォーム」坂本

「貧しい国」への支援を考えると、忘れてならないのは、なぜ「貧しい国」は貧しいのかという根本的な問題です。その答えは、「富裕国」がなぜ豊かなのかという問題の答えと重なります。貧富の格差は、富裕者が作り出した制度のあり方にこそ原因があります。私たちが、もしも世界の貧富の格差をなくしたいと考えるなら、「富裕国」である日本という国のあり方を考え直すことこそが必要です。

このような強者と弱者の関係は、すべての差別問題に共通していると思います。そうした差別を解消するには、強者が作り出した制度を強者自らが見直し、根底から覆さなければ、実現しません。つまり「貧しい国」の問題は「富裕国」の問題であり、女性の差別問題は男性の問題であり、障がい者の問題は健常者の問題なのです。

障がい者の差別問題を考えると、国の貧富を問わず、ハンディキャップを負っている点で、障がい者は社会的により困難な状況に置かれているといえます。先進国をもって任ずる日本でも、障がい者への差別はまったくなくなったわけではありません。障がい者受け入れ施設建設が周辺住民による反対の憂き目にあったり、普通学級への障がい児入学が拒否されたりするなどのニュースを現在でもよく耳にしますし、何気ない日常会話の中でも、障がい者問題を話題にすることを避ける風潮さえあります。

「社会活動で最も大事なことは、弱い立場の人々に光をあてること」。これは私の信条でもあるのですが、政治の上でも、日常生活の上でも、原則となるものだと思います。「富裕国」と「貧しい国」の間だけでなく、「貧しい国」の中にも、「強い者・富める者」と「弱い者・貧しい者」という格差や差別があります。私たちが支援している「子どもたち」は、もちろん後者ですが、障がいを持つ子どもたち、また男性優位社会で弱い立場にいる女兒たちは、さらに弱い立場にあるといえます。

アフリカでは残念ながら、障がい者をめぐる状況は「富裕国」ほど良くはありません。施設や設備、マンパワーが不足している以上に、障がい者を保護する制度や、障がい者は社会が守らなければならないという人権意識そのものが欠けているのが現状です。ひとたび障がい児として生まれた子どもの多くは、日の目を見ることさえ難しいのです。けれども、あまり重度ではない肢体不自由な障がいを持つ子どもの場合、松葉杖や車椅子さえあれば就学が可能なケースも少なくないはずで、その程度の障がいであれば、周りの子どもたちが世話をしあげることによって学校生活が送れると思いますし、また、その子の世話をすることで、子どもたちの社会意識も向上するのではないかと思います。程度の軽い身体障がい児が支援地域にいるのであれば、私たちの援助で、少しでも就学できるようお手伝いできないだろうか。既に就学している子どもたち、あるいは周囲の大人たちにも、最も弱い立場の子どもを助ける必要性を感じてもらえたら、地域での差別や格差を考えてもらえるきっかけにもなるだろう。私は、そう考えていました。

2月の初め、ディウフ会長の元にJICAから、「日本に研修に来ているセネガル人が、障がい児への支援をしてくれる団体を探しているのだが、会ってもらえないか」という連絡があり、早速、会長と私がお会いすることになりました。その方は、ファティック(当会が支援している地域と重なります)のチアバ小学校で校長をされているアマディ・ジャロさんという方で、話の概要は以下のようなものでした。

「セネガルでは、障がい児は親からも見放され、辛い状況にある。政府も、障がい児には何もしてくれない。自分

は子供の頃から、そうした人々を心痛の思いで見えてきた。教師という身分の今、障がい児を支援するのが自分の責任だと思ふようになった。去年、仲間の教師たち8人で、地区に19ある学校を調査した結果、60人の障がい児がいたことが分かり、国際NGOワールド・ビジョンの援助で、特に障がいの重い1人に車椅子を、5人に松葉杖を、そして60人すべてに学用品を贈った。しかし、ワールド・ビジョンは支援請求に際しての審査が厳しく、また毎年援助を受けることもできないので、日本で支援してくれる団体を探している。パオバブの会に支援をお願いできないだろうか」。

真摯な語り口から、誠実そうな人柄が垣間見えました。私たちは、「当会はとても小さな団体で、活動資金も乏しい。すぐに支援ができるような態勢にはないが、将来的には支援ができるよう努力したい。これからは、お互いに協力できるよう友好関係を築きたい」とジャロさんにお応えしました。

それにしても、60人という障がい児の多さには驚きます。以前、西アフリカを旅行した時、障がい者の多いことに印象を強くしたことがあります。特にセネガルの首都ダカールでは、たくさんの障がい者が物乞いをしている姿を目の当たりにして、どうしてこんなに障がい者が多いのか、大変に訝ったものです。その理由のひとつとして、衛生環境の悪さがあるのではないかと考えていましたので、この話をジャロさんにしたところ、「まったく、その通り」という答えが返ってきました。

彼は、家庭や地域での衛生環境改善のために、医師を自分の村に呼び、講演会を開こうとしたことがあったそうですが、親たちは自分たちの生活だけで手一杯で、なかなか集まってくれず、とても苦労したということでした。このお話から、私たちも、「衛生環境をよくして、病気を減らすことも教育の目的」という思いを強くしました。

さて、10月はセネガルでは新学期のシーズンです。これに合わせて、当会で支援している4つの学校に、調査フォームを送る計画が進んでいます。その学校には、何年生が何人いるか、教室やトイレなどの設備は充分かなどに関する調査書類で、昨年、初めて一式を整えて、各学校に送ったものです。しかし、いくつかの重要な項目がありませんでしたので、それらを追加することにしました。

私たちの支援が有効に機能しているかどうかを知るには、就学率が毎年上がっているかどうかを調べる必要がありますので、まず、その学区での就学率の調査項目を追加しました。次に加えたのが非就学児童の調査項目（男女別・年齢別、非就学の理由）で、男女で就学率の違いがあるのかが分かりますし、非就学児童への支援の仕方を考えるヒントにもなると思います。それから先にも触れた、障がい児の調査項目（個別の児童の年齢と性別、障がいの種類や程度、就学か非就学か、非就学の場合どのような支援があれば就学可能か）も加えました。これが、当会で初めての障がい児に関する調査となります。また、前年度の卒業者数と中学進学者数の調査項目（男女別）も新たに加えました。

調査の結果、調査方法に足りない点が出てくるかもしれませんが、随時、改善したいと思います。すべての項目を埋めてもらえるかどうか、なかなか難しいところもあると思うのですが、なぜ、このような調査が必要なのかを知ってもらえることが、お互いの信頼関係を築く上で不可欠なのだと私は考えています。